

【「大川小津波訴訟」勝訴】「ここに来れば娘に会えるような気がする」9歳の長女、未捺さんを亡くした只野英昭さん

「『会いに来たよ』と、娘に語りかけている感覚で訪れている」

吹きさらしになったままの石巻市立大川小の被災校舎で、只野英昭さん（45）は掃除を続けている。当時5年生だった長男の哲也さん（17）は一命を取り留めたが、3年生だった長女、未捺（みな）さん=当時（9）=は津波の犠牲となった。



3年生だった長女の未捺さんを亡くした只野英昭さん。「ここに来れば、娘に会えるような気がする」＝石巻市立大川小旧校舎（上田直輝撮影）

「『会いに来たよ』と、娘に語りかけている感覚で訪れている」

おとなしく照れ屋さん。東日本大震災直前のバレンタインデーにはちょっぴり恥ずかしそうにチョコを渡してくれた。結局、チョコは甘い物が好きな未捺さんと一緒に食べた。

ホワイトデーには何を買ってあげようか。今乗っている哲也君の“お下がり”の自転車を買って替えてあげることも考えたが、おもちゃのピアノしか持っていなかったため、電子ピアノを買うことにした。

未捺さんはピアノ教室に通い、日に日に上達していた。震災が起こったのは、電子ピアノの配達予定日の3日前のことだった。

未捺さんは震災から9日後に発見された。妻のしろえさん=当時（41）、父の弘さん=同（67）=も亡くなった。「申し訳ありませんが、（ピアノを）キャンセルしたい」。業者に涙声で事情を説明した。

震災から3年余り。墓地を建て直したとき、未捺さんのためにピアノの形をした物入れを備えた。

「やっと、約束のお返しを届けたよ。ママとおじいちゃんに弾いてあげてね」

震災後、只野さんは哲也君と一緒に家族の思い出の場所に足を運んだ。

最初はどこにも行けなかったという。レストランに行き、いつも4人で座っていた席に2人で座る。思わず涙がこぼれた。

それでも、ありとあらゆる場所に行った。雄勝町の公園を訪れたとき、哲也さんが「未捺とここに来て、遊んだよね」とつぶやいた。それを聞いて、『こいつも前向きになれたんだろうか』とも感じた。

× × ×

一方で、市の遺族に対する説明会での対応には落胆するばかりだった。震災発生当時の状況をつぶさに語った哲也さんの証言は、「子供の記憶は変わる」として切り捨てられた。

悪しき前例は作りたくない。繰り返してほしくもない。「このままにはできない」。そんな思いで提訴に踏み切った。

本来ならば、裁判にもつれこむような話ではないと思う。「こんな事やってるうちに、『次の大川小の悲劇』があったらどうするんだ」と憤りを感じる。

仕事や裁判を進める傍ら、被災校舎に通い続けた。掃除をしたり、訪れた人たちを案内したり。ここで起きた悲劇を伝えてきた。「この場所に来てくれた人に、ここで何があったのが知ってもらいたい」

つらいからと言って、何もしないわけにはいかない。しろえさんに「あんた、何してきたの?」と怒られてしまう。それより「ご苦労さま」と言ってもらいたい。そんな思いで、やれることを精いっぱいやってきた。

最愛の娘を亡くした悲しみは癒えない。あの日、児童たちが裏山に避難せず、結果として津波にのまれた「空白の51分」がずっと続いているような感覚だ。

「判決が出るまで、あの日をさまよっているような気がする」

（上田直輝）